

第1回河川津波対策検討会 議事要旨

平成 23 年 7 月 7 日(木) 10 : 00 ~ 12 : 00

合同庁舎3号館水管理・国土保全局会議室

【委員出席者】

佐藤慎司委員、清水康行委員、田中仁委員、戸田圭一委員、福岡捷二委員(座長)

【河川流域における津波被害状況】

○堤防が破堤するかどうかは、堤外の水位と堤内の水位差がどの程度かの影響を受けることから、それについても考慮しなければならない。

○海に戻る際の引き波による構造物等の被災が大きかった。

○資料の破堤箇所等が網羅的となっていない。資料を公表するに当たって留意が必要。

○漂流物による影響も調べてほしい。

【海岸保全における検討状況】

○津波遡上高について、必ずしも標高ではない潮位基準もあるので注意が必要。

【津波防災まちづくりの検討状況】

○社整審と交政審の計画部会の緊急提言は、低頻度の大きい津波に対してどのようなまちづくりを行うべきかについてまとめたものである。河川行政としても、最終的にはまちづくりとの連携を図るような取り組みを進めるべき。

○津波対策、洪水対策はそれぞれ独立したものではない。統一した考えのもとで、それらを総合化した一体的な対応が必要。

【河川津波の外カイメージ】

○津波発生時の潮位をどのように設定するのが重要。仮に、満潮時に発生した場合は、それだけで津波高は1mくらいは上がってしまう。

【河川津波のモデル検討内容】

○河床を固定してシミュレーションを行っていると思うが、かなり変動した事例もあることから、河床変動を考慮することも検討する必要がある。

○発災前後の河道の測量データの比較を整理すること。

○仙台平野の津波は、複数の波に分裂した。これをシミュレーションにより正確に再現するのは困難であるということを理解しておく必要がある。沖合での水位データで検証することも検討するとよい。

【河川における津波対策の考え方案(骨子)】

○海岸においては津波高の設定が重要であるが、河川では河口でどのような条件を設定すべきかについて、河口での津波高だけでなく津波の入射方向や平面的な流速分布など集中の状況を含めて検討が必要。

○河川内で、津波の遡上時と戻り時にどのような現象が起きたのかを正確に調べる必要がある。

○特に二級河川で破堤などの大きな被害が発生しており、一級河川・二級河川の双方について検討が必要である。

○津波対策は水門方式とバック堤方式だけではなく、複数の対策メニューを考える必要がある。

○堤防の沈下の実態を示すこと。

【全般について】

○津波対策については、水位のみで議論すべきではなく、流速についても十分に考慮するべき。

○津波の水位上昇の継続時間は、チリ地震等の遠地津波では長時間であったと考えられるので、幅広にデータを収集すること。